

新潟大学「学生海外実習等プログラム支援事業」による 香港大学歯学部訪問

大学院医歯学総合研究科 魚 島 勝 美
(生体歯科補綴学分野)

新潟大学では平成20年度より、学生が海外で行う実習や調査に対して支援を行う事業を開始しました。本学歯学部でも、積極的に海外を見聞し、歯学部や大学院学生としてのみならず、人間としての視野を広めて欲しいと考え、これに応募いたしましたところ、採択していただきました。そこでこの支援を受けて、歯学部4年生（当時）の塩生君、南君、大学院2年生（当時）の長澤君の3名が、平成21年3月16日から19日まで香港大学歯学部を訪問して参りました。塩生君、南君は同じく4年生の君（きみ）君と共に、平成20年度のSCRIP（Student Clinician Research Program）に参加したメンバーで、長澤君には毎年SCRIPの世話役をしてもらっています。

訪問先の香港大学歯学部は香港の中心部にあって、その附属病院は主に教育病院として機能しています。つまり、歯学部附属病院を訪れる患者様

の大半は学生実習室において治療を受けると言うことです。ですから、日本のように学生実習にご協力いただける患者様を確保するために苦勞することがなく、臨床教育面では非常に恵まれた環境に学生達はおかれています。また、歯学部のプログラムはPBL（Problem Based Learning：少人数グループでの討論による自主学習）を軸として構成され、いわゆる全面的PBLカリキュラムが提供されています。イメージしにくいかもしれませんが、歯学部教育において、1年生入学時から卒業時まで、いわゆる受身の講義形式で教えられることは少なく、多くの学習は学生が自ら調べることで行われているということです。本学歯学部でも部分的にPBLを導入しており、その有効性は認識されているところですが、香港大学歯学部はこれを全面的に取り入れて成功している、世界でも数少ない歯学部のひとつです。香



香港大学歯学部附属病院看板



歯学部スタッフとの討論（左より長澤、南、塩生）

港は現在中国に返還されていますが、その国際性という点ではおそらく返還前とほとんど変わらないのでしょうか。在籍する学生の国籍は多岐に亘り、教員の多くも欧米から招聘されているので、講義等もすべて英語で行われています。

今回の訪問は現地滞在が4日間弱と短く、多くのことは望めないと思っておりましたが、幸い先方の歯学部長を始め多くのスタッフの方々が非常に好意的にアレンジをして下さいました。その結果、当方学生達はPBLへの直接参加、歯学部スタッフとの討論、歯学部学生との討論と交流、歯学部施設見学、病院施設見学と、多くの貴重な経験をすることができたと思っております（写真参照）。その結果、日本の歯学教育と香港のそれとの違い、歯学部学生の意識の違い、共通の問題点や検討課題、それぞれに特有の課題など、多くのことを感じ、考える絶好の機会になったものと思います。

今までにも本紙面上で度々ご報告して参りましたが、我々は歯学部の学生を対象としたSCRIP（日本歯科医師会主催）に継続的に参加をしております。若い皆さんが早い段階で歯学研究に少しでも触れること、そして日本国内のみならず広く海外の存在を意識することが非常に重要であると考えているからです。しかしながら、それで



香港大学歯学部長（前列左）を交えて

もなお、学生にとっては海外旅行以外で訪れる海外は遠い存在です。医歯学総合病院歯科および歯学部では近年、ロシアや台湾からの学生を毎年受け入れており、それら海外の歯学部学生にとっては一定の成果があがっていると思われます。同じようにこちらから海外に積極的に出て行き、その実情を自身の目で見、直接現地学生やスタッフとコミュニケーションを取ることは、後には得られないであろう視野の広がりをもたらします。後掲する、今回参加した3名の学生達の報告をお読みいただければ、彼女達が感じてきたある種のカルチャーショックをご理解いただけるものと思っております。私自身は今後もできるだけ多くのやる気のある学生を海外に連れ出したいと思っておりますが、大学をはじめとする関係各組織においても、海外学生実習等プログラム支援事業の拡大・継続を含めて、積極的なご支援を今後とも是非お願いしたいと思っております。

最後に、今回の香港大学訪問は、国際交流専門委員会の委員長である山田秋好副学長をはじめ、多くの方々にご支援をいただいて実現したものです。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。どうも有り難うございました。

以下、今回の参加者3名の「香港大学歯学部を訪問して」と題する報告です。

生体歯科補綴学分野 長澤 麻沙子
大学院3年生

今回の香港大学訪問では、PBLへの参加、ポリクリ見学、病院見学を行ないました。PBLでは、本学のように学生達がずっとおとなしく椅子に

座っている様子はなく、全体的に話し合いに活気がある印象を受けました。入学後の早期から身につけてきた学習方法であるせいか、学生達は討論そのものに慣れていて、ホワイトボードへのまとめ方も簡潔で分かりやすい印象でした。私の見学

したグループでは、学生の討論が停滞や脱線をしたときに、ファシリテーターとのテンポの良い会話で話し合いが前進していましたし、学生に考えさせる時間を多く確保する、学生の発言に対して「何故思うのか」「もっと考えて」といった有効な問いかけをする、といったファシリテーターの役割が重要であると感じました。学生はある質問に答えられないと、どうして答えられないかを考えることになり、必然的に学習課題と自分たちの問題点が見えてくることとなります。ファシリテーターのPBLに対する目的意識如何により、その時間がどのように学生にとって効果的に消化されるかを感じました。また具体的には、本学に比べてシナリオが短く、情報量がそれほど多くないこと、討論の最後に該当学習課題に関する情報ソースに関する情報提供をしっかりすることで学生の効果的学習を促進すること、などの違いもありました。

PBLは自分たちにとって役立っているか、また、PBLがポリクリに役立っているか、を学生達に聞いたところ、その評価はまちまちでした。フルPBLが学生にどう評価されているか、5年間に亘る学習に対するモチベーションをどのように継続しているのかは興味深いところです。新潟大学の学生と比較して同じアンケート等で調べられたら面白いと思いました。

ポリクリ見学では臨床実習と根管治療実習を見学しました。見学中に一番感じたことは、香港の学生達とはとにかくよく話しかけてくるということでした。外国人とのコミュニケーションに抵抗がなく、その積極性や言語能力・会話能力の高さを実感しました。香港大学では授業はほぼ英語です

し(しかし学生同士の会話は広東語)、生徒の半分が中国以外の出身であるということも影響していると思いますが、英語が話せて当然という感覚は日本人にはあまりないものであり、それ自体が世界の国々に対する日本の障害になっているところだと感じました。たとえ海外からの訪問者とのほんの少しの会話でも、積み重ねれば大きな情報源です。

臨床実習は4年生が実際の患者様を治療していましたが、それと並行して1年生が見学をしていました。ただしそれはただの見学ではなく、4年生やそのアシスタント、患者様にさえ積極的に質問しないと解答を導き出せない課題を与えられた結果であり、真剣さが感じられました。と同時に4年生は自分のやっていることを教えなくてはならないため、彼らにとっても非常に学習効果が高いと感じました。

根管治療実習で印象的だったのは、ライターと学生とのディスカッションが常にどこかで行なわれていることでした。そこでもライターは学生に考えさせるような質問を投げかけていましたし、同時に実習を行なうために必要なことを丁寧に解説していました。どこかで討論が始まると自然に人が集まってくるのが特徴的で、PBLの経験がポリクリでも生かされていると感じました。また実習機が横1列に並んだ本学とは違ってアイランド型でした。これも討論を促進するひとつの要素であるようでした。今回の見学を通して強く感じたことは、病院を含めた大学全体の学生教育に対する積極的な姿勢と、それに伴うスタッフや設備等の充実がなされているということでした。

今回の香港大学訪問における最も大きな成果



外来見学：予診担当スタッフと



PBLに参加して

は、塩生さん、南さんが卒前に他大学、特に外国の大学を見学する機会を得、それが彼女らに大きな影響を及ぼした、ということだと思います。彼女らはいわゆるカルチャーショックを受け、香港の学生が同じ年とは思えない、自分たちはこのままではいけないというようなことを滞在中常に口にしていました（もちろん日本の良さも同時に認識したはずです）。このことは、大学院生である私にも当然言えることですが、今回彼女達と共に行動して、とくに卒前でのインパクトの大きさを感じたのです。歯科医師を目指す学生が何を具体的な目標に、どうあるべきかは、自分の置かれた環境の中だけではどうしてもイメージしにくいと思います。自分たちの置かれている環境が全てであると認識してしまう危険性すらあります。今後も

希望する学生に対して、大学は積極的に彼らの頭が柔軟な早い時期に海外に出る機会を与えることは有益であると思いますし、そのことが以降の学生生活を有意義なものにする可能性が非常に高いと思います。同じ歯科医師を目指すものとして、諸外国の学生と自分たちを比較することは大学教育の1つの手段として、学生のモチベーションを上げることに非常に有用であると思われました。

最後に今回このような機会を与えてくださった、関係者の方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。今回の経験を新潟大学のためにフィードバックしたいと思います。ありがとうございました。

歯学科5年生 塩生 有希

今回、私たちは3月中旬に香港大学歯学部を訪問する機会をいただくことができました。香港は中国の特別行政区のひとつであり、人口は約700万人です。近年では日本と同様に高齢化・少子化が進んでいます。香港大学歯学部は香港唯一の歯学部で、歯科医師数は2千人程度です。このため香港における歯科医師はとても地位や給料の高い職業とみなされているようでした。

一方、日本には歯学部・歯科大学が29校も存在し、歯科医師数は約10万人で、歯科医師の過剰が問題視されています。そしてここで何より問題なのは、技量や知識に欠ける歯科医師の存在です。今後、歯学に関わる私たちは、こうした歯科医師

を生み出してしまう現在の歯学教育を見直し、改善していかなければならないと思います。そこで、今回の訪問を通して日本の歯学教育に有用だと感じた点を中心に述べたいと思います。

今回の訪問では、3学年のProblem Based Learning (PBL) への参加、2学年の根管治療実習の見学、4学年の患者様に対する治療の見学、歯学科1年生と歯科衛生士を目指す2年生とが交流しながらの実習、病院・技工室等の見学を行いました。

PBLとは、少人数のグループに対してある症例が与えられ、1回目のチュートリアルで議論しながら問題提起がなされた後、その問題に関するSelf-directed Learningが行われ、2回目のチュートリアルで各自調べた情報を元に再び討



基礎実習風景

論をするという学習方法です。我が新潟大学歯学部では数年前から5年次に約半年間だけ取り入れていますが、香港大学歯学部では1年次から卒業する5年次まで取り入れられています。1年次においては、PBLが95%を占めるほど、PBL主体の教育方法となっています。PBLを行うにあたっての香港大学の工夫として、7～8週を1モジュールとして、1モジュールごとにグループ再編成を行い、担当ファシリテーターも毎回変えています。そうすることで、グループ間での学習効果への影響の差をなくすとともに、メンバーを変えることで個人の倦怠感を無くし、意欲を持たせる効果が期待できるようです。また、2回目のチュートリアル後に各グループでレポートやポスター、ビデオ、role-playといった形でまとめられたものは、web-siteにupされます。これは学生の意欲を大きく向上させているようでした。また、要望があれば、1モジュール終了後にレクチャーを行っており、このような支援体制を提供することでさらなる学習効果が期待できると感じました。

実習の見学では、早期からの実習開始、設備の良さ、我が校よりも最新の器具の使用等が顕著に見られました。特に印象的だったのは、少人数ごとにデモが行われ、デモの最中に学生から質問が飛び交い、先生は逆に質問をし返すことで学生に答えを導いていたことです。この方法にはPBLが活かされているように感じました。

また、歯学科1年生と歯科衛生士を目指す2年生とが交流しながらの実習は我が校にはありません。こうした異なる学科が交流しながら、学生が学生に教えるという教育方法はとても興味深く、有効ではないかと感じました。逆に、歯科医師と歯科衛生士は密接に関わる職業なのに、なぜこうしたものが我が校には無いのか、不思議に思いました。



臨床実習室

病院見学では、施設の新しさ、学生の教育や卒業後を考慮した工夫が感じられました。香港においては香港大学歯学部が唯一の歯科医師養成機関であるということが、歯科界全体での歯学教育の重要性認識を背景に、大学側の教育に対する積極的姿勢、すなわち学習環境(PBL室、講義室、外国語の選択授業の充実、図書室、実習室、病院等)の整備に繋がり、結果としてそれが学生の学習意欲向上へと繋がっていると感じました。

日本では大学が多く存在するため全大学が団結して教育を改善することは非常に困難なのかもしれませんが、決してあきらめてはいけないと思います。各大学が歯科界のあるべき姿を考えて改善していけば明るい将来が見えてくると信じて、我が新潟大学歯学部においても教育に力を入れる必要があると思いました。

最後に、今回香港の学生と触れ合って、香港の学生は、同じ学生と思えないほど、人間性が豊かで、積極的で、国際的であることを目の当たりにしました。この積極性や国際化には外国語(英語や日本語など)が頻用されていることが大きく関わっていると思います。今回改めて、外国語を学ぶことの必要性を痛感しました。我が校でも積極的に外国語を取り入れていくべきだと思います。このような機会を与えていただき、どうも有難うございました。

歯学科5年生 南 智香子

今回、平成20年度新潟大学国際交流委員会事業の一環として香港大学歯学部への訪問の機会をい

ただきました。3日間という短い期間ではありましたが、多くのことを経験し学ぶことができました。

私は、今年の8月に開催された Student

Clinician Research Programに参加し、全国の歯学部生と交流する機会を得ました。その交流から大学案内やインターネットといった情報からは得ることのできない実際の大学の様子や、自分達との相違点などを知りえることができ良い刺激となり、同時に、さらに多くの学生と交流を深めて視野を広げたいと思うようになりました。また、歯学科5年次から始まるPBLによる授業が、海外の大学ではどのように行われているのか非常に興味があり、PBLの世界的先駆者である香港大学を訪ね、これからの学習に役立てたいと考えました。

香港大学での初日は、まず歯学部3年生のPBLに参加させていただきました。私達も4年次に数回のPBLの経験がありますが、比較すると異なる点が多く見受けられました。学生は1年次からPBLを行っているせいもあり、役割分担、時間配分など学生主体でスムーズに授業は進行されていきます。日本では学生が意見を出し合うまでには時間がかかりますが、現地の学生においてはほとんどの学生が意見を積極的に発言します。そこからは、毎回のPBLにおいて最大限に学び取ろう、無駄にしないといった態度がうかがえました。また、学生とファシリテーターの関係も日本とは少し異なり、学生達が効率良く学習が進められるように、なおかつ主体はあくまで学生であるといったあり方は私の目には新鮮にうつりました。私達が普段受けているような講義形式では、どうしても学生は受身となり、問題処理能力を養うというよりは、多くの場合情報を付与されるだけとなり、その情報を生かす能力に欠けてしまいます。つまり、そのケースごとに必要な情報



歯科医師歯科衛生士合同臨床実習室にて

を自らのストックの中から取り出す訓練がなされないということです。これは臨床においては致命的なことであり、この能力は早期から養わなければならないものだと思います。また講義形式であると、診療科ごとまた基礎科目と臨床科目といった風にカテゴリーができてしまい、情報を総合的にとらえづらくなります。一方、PBL形式であるとそういったことが少なく、全体的に物事をとらえやすく、学習範囲を狭めることはありません。これは、学生の基礎科目離れを抑制する効果もあるのではないかと感じました。しかし、一方で問題点もあるようでした。PBLは自ら積極的に参加して初めて学習効果があります。そのため、そういったことを不得意とする学生には望ましい効果が得られません。もちろん香港大学にはサポート体制がありますが、まだまだ課題があるようでした。

大学の計らいで学部学生との交流の機会もいただき、学生の立場からの意見も得ることができ多くの刺激を受けました。PBLや授業について以外にも、現地の大学生活の様子を聞くことができ実状を知り、日本と香港との違いも多々ありましたが、同じ歯学を学ぶ学生同士の共通点もあり興味深かったです。彼らとの交流で感じたことは、歯学部の学生としての自覚や誇りを低学年の時から持っていることでした。香港は、日本とは異なり5年制であるため早期から臨床科目の実習が始まります。そういったことが背景にあるのかもしれませんが、私自身見習わなければいけない部分が多くありました。この交流を今回だけのものとせず、これからも親交を深めていきたいと考えています。

初日の午後と2日目は、学生の実習風景、Polyclinicや病院を見学させていただきました。学生と教員が対話しやすいように実習室が工夫されていて、私たちが実習中に感じる不便さを現地では感じることはありませんでした。実習自体もPBLが生かされていて、教員がデモンストレーションを行うだけでなく、学生の質問や意見をうまく引き出すようなものでした。また、日本とは異なり学生実習においても教員だけでなく様々なスタッフが実習を支え、大学そして病院全体で

学生を教育するシステムが確立されているよう感じました。病院の設備も日本と遜色ないか、それ以上の機材もあり、また日本とは異なる診療体制であったりと海外の歯科事情を直接知ることができました。

今回の香港大学歯学部訪問は、私にとって非常に有意義な時間でした。今回学んだことを、これからの学生生活や歯科医師人生に役立てていきたいと考えています。どうも有り難うございました。



香港大学歯学部学生との交流